

忘れられない本



grasshouse

忘れられない本

それはわたしがまだ、血色の悪い登校拒否気味の陰気な少女だった頃の話である。父親の転勤のため、転校ばかり繰り返していたわたしは、学校が嫌で嫌でたまらなかった。

男の子たちは、わたしの髪の毛をひっぱり、椅子の上に蜥蜴の死骸を置いた。蜥蜴は青緑の金属のように美しく、悲しさと惨めさで鋭く光り輝いていた。

彼らはわたしの弁当を覗き込み、薄ら笑いをしていた。母親の作ってくれた弁当の中身が、変に思われたらしい。色とりどりの珍しいフルーツで縁取られていたのだ。

こんな田舎町、そう長くは、いないんだから。もう少し、ましな都会に引っ越してやるわ、と、わたしは目を伏せながら呟いていた。

けれども本当のところ、わたしにふさわしい学校など、この世のどこかにあるとは、どうてい思えなかったのだけれども。

――あの本を見つけたのはほんの偶然だった。

ある年の夏、公園脇の坂道にある市立図書館の薄暗い片隅で、昆虫図鑑を調べているとき、何か虫が啼くような、あるいは歯軋りをするような微かな声が書棚の奥から聞こえてきた。

きっと蟬か何か、通気孔を通して、図書館館内に紛れ込んできたのだろうと思って、最初は気にもとめなかった。

わたしは夏休みの図書館が好きだった。

三階の閲覧室では、受験生が辞書と首っ引きで、もぞもぞと鉛筆を動かしていたが、二階では、人影はほとんど見当たらない。

冷房でひんやりと重たくなった空気が、何千冊という書物の間をゆっくりと這い進んでいった。

外の陽射しは強いのに、図書館の内部は、カーテンを透かした薄暗い黄緑色の光線で満たされていた。あたりにいるのは清掃係らしいモップを持った小さな老人と、ひとりの神経質げな大学生だけだった。

マイマイカブリという、陰気な昆虫について調べるのが、グループ研究の中でのわたしの役割だった。その虫は、木の葉の下などに隠れている蝸牛を見つけてはひっくり返し、固く鋭い顎で、内部につまった柔らかな肉を食いちぎるのだった。その映像を見たことがある。外科医のような熱心さで、その昆虫は孤独で陰湿な食事をする。

わたしは図鑑を見ているうちに嫌気がさして、せめてテントウ虫か、カナブンぐらいの昆虫だったらどんなにましだろうと悔やんだ。

転校してきてすぐだったので、わたしの発言権はなく、こんな嫌な肉食の昆虫をあてがわれてしまったのだ。

厭世的な老人たちが開くような、金の背表紙の古い書物がぎっしり並び、その書物は館内の重力まで変化させているようで、わたしは書架から書架へと歩くほど、体がだるくなり気分が悪くな

ってきた。ローティーンするとき、わたしはすでに倦怠の中に沈んでいるような少女だったのだ。テレビを見るだけで、体力が奪われた。わたしを教え導いてくれる大人や教師など、どこにもいそうもなかった。太陽光線すら堪えられず、舗道の蔭を歩いていた。

「ひとけのない図書館は好きなはずなのに」

わたしは嘔吐感までもよおしてきたので、半ば苛立ちながら机の上に昆虫図鑑を投げ出した。その時だった。小さな虫の声のようなものが響いてきたのは。

こんな灰色の本棚に、鮮やかな緑のバッタやマツムシが隠れていたなら、ちょっと素敵だろうと思ひ、わたしはしゃがんであたりを見回した。

しかし声は、書架の下の段から聞こえてくるらしい。わたしが腰を屈めると、歯軋りのような声は、いっそう小刻みに響いてきた。

どうやら声は右から三冊目の本から聞こえてくるようだ。その書物は『蜷村精多郎全集 全一卷』と著者の名前が書いてあるだけで、どことといった特徴のない地味な本であった。

周囲には地理関係の書籍が並んでいる。

「文学書がこんなところに来ているわ。もとに戻さなきゃ」

しかし黒光りするその分厚い本を手にとった途端、わたしはその異様な重さにショックを受けた。

軽く一〇キロはあるだろう。育ち盛りの子供を抱いたような予想外の違和を味わった。これは書物ではなくて金槌や釘のぎっしり詰まった道具箱ではないだろうか。

わたしは好奇心に駆られ、やっとのことで抱えながら表紙を開いてみた。

するとどうだろう。

中には文字は一行もなく、鮮やかな赤と桃色の模様が描かれているだけであった。ちょうど科学図鑑にあるような何万光年も向こうの惑星の想像図のようで、幾筋かのシマが渦を巻いたり並行に流れたりしていた。あるいは肉屋の店頭に並んだハムの薔薇色の残酷な切断面のようにも見えた。

「綺麗じゃないの。わりかし」

わたしはその時、色彩の鮮やかさに有頂天になりすぎていたかも知れない。

それというのも、次に襲って来る底冷えのするような恐怖感を、まったく予想できなかったからである。

書物の内部は鮮紅色だけではなかった。中心部のページには、青紫色や瑪瑙色の異様な塊が蠢いていた。次々とページをめくっていくうち、それがどこかで見たような色合いであることに気がついた。

「人間の、内臓の色」

そうだ。これは確かに人体解剖図の色彩なのだ。

白っぽい脂肪の色を帯びた肉の帯。透明感のある黄緑色をした膵臓。どんよりとした赤紫色の肝臓。

不意に書物の黴臭い匂いが消えて、あたりには屠殺場のような生臭い匂いが充満してきた。すべての音が遠ざかった。

世界がこの重たい書物とわたしだけになったような気がした。

わたしは最初のページを開いた。するとその図柄はゆっくりと変化していく。

書物という冥い箱の中で、何か不思議な生き物が向きを変えているようであった。

色とりどりの洗濯物が、濁った乳色の水の中で、ぐるぐると渦を巻きつつ、上になり下になりを繰り返している光景をも連想した。

あるページでは黒光りする髪の毛の塊が見え、別のページでは白い背骨の秩序ある配列が覗いていた。溶解する肉の海に、驚くほど大きな眼球が、わたしを哀しげに見つめながら、ゆっくりと沈んでいった。

わたしはとつぜん、その本が人間ひとりを溶かし込んだ書物であるという唐突な思いに襲われた。

歯軋りのような音が烈しくなった。時にはそれはわたしの内部から聞こえてくるようでもあり、図書館全体の壁という壁から聞こえてくる呻きのようにもあった。

「お嬢さん、その本に興味をお持ちかね」

不意に、嘎れた声が聞こえた。

目の前に、斜めに長いモップを持った小柄な老人が立っていた。

色褪せた青い作業服を着た、時代から置き去りにされたようなまるで影のような老人だった。深い失意と疲労感が全身から漂っていた。

「いえ、べつに」

わたしはかすかにふるえながら、答えた。

「その本は、蜷村精多郎という小説家の本なんだがね。といったところで、いまではもう誰も知らんだろう」

懐かしむように、老人は語り始めた。

「小林多喜二よりも少し後、やはり官憲によって虐殺されたプロレタリア作家だよ。生前出版された著作は、その一冊だけ。多喜二のように歴史的な象徴にはなれなかった。まあ、要するに、才能がなかったんだな。幸いなことに、運動に理解のあった地方の篤志家が本を出してくれたんだ。プロレタリア作家が金持に助けられるなんて皮肉なことだ。……だがね、その本には、精多郎文学のすべてが詰まっているといわれているよ」

わたしには、プロレタリア作家とか小林多喜二とか難しいことは何も分からなかった。老人は静かにモップを立て掛け、蠟のように白い指で、ふるえるようにページをめくった。老人の指にふれられると、それぞれの紙は、薄い扇風機の羽のように透明になって、素早くめくられていった。それはまるで不吉な夢のような光景だった。

奇妙なことに、さっきの内臓や眼球は見えず、二段組みの細かい文字がびっしりと黒蟻の群れのように並んでいた。

採光のよい館内の窓から、放射状の蒼い木影が床に落ちている。

誰も開かなかった紙面に、光が柔らかく反射している。わたしは呼吸が静かになってゆくを感じた。

「ほとんど無名のまま終わってしまった作家だが、私は若い頃、この本を読んで人生観が変わっ

たのさ」

けれども老人は、その作家の作品を読み、自分がどう変わったのかは教えてくれなかった。

彼は、黒い湿った本をゆっくりと閉じると、

「若い人がこういう本と出会うのは、いいことだ」といって瞑目した。

蝉の音が遠くで聞こえた。それ以外では空調音だけ。

老人はしばらくの沈黙の後、「昔のことだ。もうずいぶん、昔のことだ」といって、首を振った

。

そしてのろのろと長いモップを引きずりながら、書架の向こうへと消えていった。

ふと目を凝らすと、あの影のような老人は、壁の中へと静かに吸い込まれていったように思われた。

わたしは怖ろしくなった。

この老人そのものも、本当に生きている人間かどうか疑わしいと思った。まるで書架の闇に潜んでいる人間ならぬ者、黴臭い書物の中から出てきた精霊のようにも思われた。

わたしは目眩のするような戦慄の中で、蝉の音が雨のように降ってくる図書館脇の木陰のゆるやかなスロープを、足早に歩いた。

数台の自転車が私の脇を過ぎた。

からかい気味の口調が聞こえたので、同級生の男の子達だったかも知れない。わたしは目をつむり耳に両手を当てると、彼らを見捨てて小走りに坂道を通り過ぎた。

本の厚い扉を開くと、冷えた色鮮やかな肉が詰まっているという戦慄。

思考が肉であり、肉が思考であること――。

その時は言葉にならなかったが、その時わたしを襲ったのは、そんな怖ろしい観念だったかも知れない。

今でも人気のない図書館が、屍体安置室のように思われる時がある。すべての書物という書物は、死者たちの思考を詰め込んだお棺なのだ。

呼吸を整えるために湿った木陰のベンチに座ると、手のひらにぬるりとした感触があった。蝸牛が、ペンキの剥げた板の表面を、ゆるゆると這っていたのだ。

渦巻きの中に棲む柔らかな肉。その小さな軟体動物は、伸び縮みしながら、二つの角を恐る恐る上の方へと向けた。

一瞬、その肉を噛むマイマイカブリの紡錘形の青い影がのぞいたような気がした。

昆虫図鑑の挿絵のような幻は、夏の日のおびただしい蝉時雨の中にかき消えていった。

忘れられない本

<http://p.booklog.jp/book/21786>

著者 : grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

発行所 : ブクログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21786>

ブクログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21786>